

エッセイ

9回目の六甲縦走

2008年12月3日



〔練習〕

今年には本当に自信がなかった。というのは、2回、しかも半日ずつしか練習していなかったから。最初の練習は9月20日だったが、須磨浦から摩耶山を目指したのだが、高取山で本当に消耗してしまい、かろうじて鶴越までたどり着いた体たらくだった。原因は判っている。何より前日の深酒が過ぎているから、とは思ったものの、上り坂が続くとときめん、体が自然の反応をしたといえる。このときも高取山の前の石段はかなり簡単にいけたのに正直なものだ。

二回目は、鶴越から摩耶山をめざして、このときは前夜気をつけたこともあり、少し体が重かったが何とか菊水、鍋蓋、市が原、摩耶、青谷、新神戸までかなりのスピードでこなすことができた。しかし、何度登ってもきつくてつらい山登りの醍醐味を味わえるのは菊水山だ。登り口に看板がある。「これより山頂900m」と書かれてあり、「よし」と発奮するのだが、約20～25分間の登りづくし。私は休憩をとらないように気をつけている。遅くてもよい。ウサギとカメとのタイプがあるとすれば、必ずしもウサギが早くはない。実感している。カメスタイルで休まず弛まず一步一步を積み上げた方が結果として早いことが多いのだ。何故か。

息切れして例えば3分休憩したとする。その間カメスタイルは一步一步積み重ねている。100や200メートルくらいはすぐに追いつき追い抜かれてしまう。今回も、六甲分岐点から下りの宝塚までの間、小グループを2〜3ほど追い抜いたが、大平山のいつものように休憩する道路沿いで休んでいるうちに抜かれてしまった。カメは強い。

〔スタート〕

今回は、スタート地点に行ったのが午前4時半であったが、すでに列は坂道を下りきって2号線歩道まで連なっていた。県庁チームの仲間が待っていてくれたので、それでも中間ぐらいに並ぶことができた。スタートは5時からだったが、私たちのスタートは5時22分になってしまった。

〔渋滞〕

このスタートの10分程度の差が大きく影響してくることになる。須磨アルプスと高取山、その前の階段での混雑がまさしく昨年と比べて20分程度遅れを作ってしまった。しかし、渋滞もいいこともある。高取山や菊水山など縦走の難所がいくつかあるが、自然と休み休みしながら登ることができるので、私のように登りが苦手な者にとってはエネルギーの消費が少なくて助かるということもある。しかし、少し遅すぎたといえるか。

〔摩耶山頂〕

摩耶山頂の掬星台に着いたのが1時過ぎ、結果として再スタートは1時20分頃となってしまった。しかし、頂上でのボランティアの皆様のホットレモンの美味しいこと、疲れが一気に取れる思い。感謝します。山歩きには水分の補給とエネルギーの補充が欠かせない。既に出発時からスポーツ飲料500ccを2本持っていたが、市が原までになくなり、お茶を1本補充したが、これも食事で飲んでしまい、またお茶と水を補充した。それに、体力が極度に落ちてくるとおにぎりも喉に入らない。既に菊水山山頂で1個食し、鍋蓋山でミカン1個を、市が原でビタミンゼリーを食べていたが、摩耶山頂ではおにぎり1個しか入らなかった。せっかくのおかずも卵焼き二切れのみ。これからが思いやられる心境だった。

〔六甲山〕

これから六甲最高峰の先の宝塚へ下りる分岐点まで延々歩かねばならない。3分の2が自動車道のアスファルト道、3分の1が山道であるが、摩耶山にまでかろうじてたどり着いた身としては、この山道での坂道のきついこと。アゴニー坂の下り道の風化花崗岩の入り交じった急峻な道には膝が踊りかねない。また、丁字ヶ辻までの登りは、ヘトヘトになっているだけにもものすごく厳しい。今回は、例年、陵雲台の六甲ガーデンテラスでソフトクリームを食べるのだが、20分の遅れを取り戻すために我慢することにした。そのかわり、大変うれしかったのが、六甲山郵便局の甘酒サービスだった。去年は、郵政民営化の一環として例年の甘酒サービスがなかったもので、たいへんがっかりしていたが、今年は復活していた。誠に感謝。栄養補給、2杯もいただいた。このように沿道で激励を受けることは大きな励みになる。

〔分岐点から〕

分岐点からは下りがほとんど、石ころごろごろの山道である。約12kmだが、これを例年は2時間で下りている。今年はどうか。やはり体力が残っているかどうかの勝負である。しかも、暗くならないうちにどこまで下りることができるか。去年は11月11日の前半参加だったので、日没時間まで少し間があったが、今年は23日だから暗くなるのが早い。途中でライトの点灯をせざるを得なかった。ライトといえば3～4年前までは、最終チェックポイントが一軒茶屋の近くにあつて、点灯テストに合格しないと分岐点から宝塚へ下ろしてくれなかったのだが、今はチェックがなくなっているのか、この2～3回チェックを受けていない。ともかく、ライトの視野は狭いので、しかも石ころまぶれ、急峻な箇所もあるとなると、飛ばせないのは当然である。とくに、宝塚の塩尾寺までの500mほどの下り道は、大きな石の間を縫うように下りていくのだから余程注意していないと大けがをしかねない危険を潜めている。六甲最高峰から1000mを一気に下りていくのだから当然そのような箇所がいくつかあつてしかるべきだ。

〔塩尾寺〕

塩尾寺からの下りは淡々としたとしたアスファルト道。しかしこれがかせ者なのだ。特に足がパンパンに張ってしまい、坂道を真っ直ぐに下りようとするとうるむが伸びてくれず、足が前後に進んでくれなくなる。このときは、奥手ならぬ後足でバックしていくと何とか歩ける。私の第1回目の縦走の時はまさしくそうであった。坂道を普通に歩いて下りられない。それだけ疲労が蓄積されてくるからだろう。第2回目以降は、今回も含めてこのようなことにならないのは、身体が体験で学んでくれているからか。

〔ゴール〕

ゴールは宝塚大橋のふもと、ちょうど「若水」ホテルの前になる。今年も兵庫県山岳連盟の中島さんと神戸市の大森観光監が迎えてくれた。認定書をもらい、記念の楯、今年はヤブツバキの花であった。私も9つの楯を集めたことになる。まあ、頑張ってきたものだ。仲間と六甲縦走記念の看板の前で集合写真を撮った。さぞやくたびれた顔をしていたことだろう。

今年もうれしいことは、宝塚のJCやボランティアグループの皆さんが、足湯と甘酒と炭酸せんべいの提供サービスを行ってくれていた。49度の足湯に疲れた足をつけるとキーンと頭まで温まり、疲れが吹っ飛ぶように感じる。甘酒は身体全体を温めてくれる。炭酸せんべいは甘味補給だ。いずれもゴール、宝塚の人たちが、神戸市主催の六甲縦走に協力して、完走者を歓迎してくれているのだ。地域連携も自主的にここまで来た感慨深い。

〔山登りを何故〕

それにしてもどうしてそんなに辛い厳しい苦しい思いをして六甲縦走などに臨んだのだろうか。登山家のマロリーは、数十年前エベレストで遭難して行方不明だった。数年前遺体が氷河とともに出てきたが、彼は「そこに山があるからだ」と言ったという。さしずめ、「そこに六甲山があるからだ」と言えばよいのだろうか。苦しい登りを一步一步積み重ねて山頂を極めたときの達成感は何事にも代え難い。もちろん、山頂から四方を臨む景観そのものも何にも代え難いが、360° パノラマは大自然の懐から街々を眼下に臨んでその雄大さやスケールに圧倒される。そのことに加えて、自分が気力と体力をふりしぼり、耐え抜いて頂上に

たどり着いたという自己実現がきっと大きな満足感を与えてくれるからだろう。

9回目の縦走達成を主催者の矢田神戸市長に話したところ、以前は10回目の記念の楯は一回り大きな立派なものだったとのこと。もっと早く達成できていればなど少し残念な気もするが、楯のために歩くのではないし、10回目の縦走達成の成就感を味わうために、よし、来年も10回目を目指して頑張ろう、とまた決意している。

発行元：いどとし.net 運営事務局

発行責任者：渡邊 勝幸

お問い合わせ：<http://www.idotoshi.net/contact/>